

## 2019 年度「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」 助成公募決定のお知らせ

一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストが公募した「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」助成について、計 4 件の企画が採択されました。分野はすべて調査・研究になります。選考委員についても併せてご紹介いたします。

### 2019 年度「ネオニコチノイド系農薬に関する企画」

#### 助成公募選考委員（あいうえお順）

- 田中 優（未来バンク理事長）
- 野島靖智（株式会社すいてん ディレクター）
- 古瀬繁範（地球と未来の環境基金理事長）
- マエキタミヤコ（サステナ代表）
- 宮田秀明（摂南大学名誉教授／環境科学、食品衛生学、公衆衛生学）
- 安田節子（食政策センター ビジョン 21 主宰人）
- 山田敏郎（金沢大学名誉教授／化学工学、蜂群崩壊症候群研究）
- 星川 淳（アクト・ビヨンド・トラスト代表理事）

### 「ネオニコチノイドによる水生生物への生態リスク比較～作目種及び散布方法による影響～」

千葉工業大学創造工学部亀田研究室 亀田 豊

助成金額: 1,000,000 円

宍道湖水田地域、静岡県茶畑地域及び千葉県水田ドローン空中散布地域における河川及び水田について、ネオニコチノイド(NN)濃度を高精度に把握し、地域特有の水生生物及び水生生物全体への生態リスクを推定する。また、対照地区として流域に農地のない佐鳴湖についても調査する。これにより、散布時期や散布量の異なる作物種に散布した場合の生態リスクの比較、ドローン空中散布と通常散布による生態リスクの比較、農地の有無によるリスクの比較を行い、リスクの低い散布方法や作物種によるリスクの差異等を把握し、広く社会に提供する。さらに、東京大学の山室教授と協力して近年動物プランクトン個体数減少の著しい宍道湖や流域住民の関心の深い佐鳴湖について NN の影響を推定し、宍道湖漁業回復法の提起や佐鳴湖の汚染状況を住民に周知する。

### 「ネオニコチノイド系農薬が佐鳴湖の生態系に与える影響調査」

<p><b>辻野兼範</b></p>
<p>助成金額: 385,000 円</p>
<p>佐鳴湖は、プランクトン、魚類などの生物は豊富に生息しているが底生生物は貧弱である。底生生物は水中の有機物を消費し、水中の浮遊生態系と底生生態系つなぐ重要な役割を果たしている。現在イトミミズ、ゴカイ、ユスリカなどの底生生物は 2000 年以降急激に減少し、その要因として塩分濃度の上昇と流域から流入するネオニコチノイド系農薬の影響が考えられる。本来は行政が調査するべきであるが、その方針・計画がないので申請者(辻野)が実施することにした。</p>
<p><b>「平野部の水田ではネオニコを使う必要が無いことを証明し見える化する」</b>  <b>特定非営利活動法人 河北潟湖沼研究所(申請者:高橋 久)</b></p>
<p>助成金額: 1,000,000 円</p>
<p>平野部にある河北潟周辺の水田地帯は面積が大きいことから、空中散布等によりネオニコチノイド系農薬が大規模に使用されている。我々は、生きもの元気米の取り組みを通じて、河北潟周辺の水田ではネオニコを使わなくても斑点米被害は起こらないことを示し、取り組みを拡大してきたが、地域では未だネオニコが「念のため」使われ続けている。今回の企画では、市民と農家の目に見える形で調査結果を効果的に示すことにより、地域におけるネオニコ使用のさらなる削減を目指す。こうした手法が、広く全国の平野部水田や、ネオニコが使用されている畑や街路樹等の取り組みにつながるよう冊子及びビデオとして整理する。</p>
<p><b>「ため池や自然止水域におけるネオニコチノイド系農薬の汚染状況と絶滅危惧水生昆虫の生息状況の相関調査」</b>  <b>苅部治紀</b></p>
<p>助成金額 : 805,600 円</p>
<p>日本固有種で絶滅危惧種Ⅰ類のマダラニワトンボの減少要因は、埋め立てや植生遷移などとされてきたが、近年原因不明の地域絶滅が進行している。今年度岐阜県内の絶滅産地数地点で予備的な水質分析を行ったところ、高濃度のネオニコチノイド系農薬が検出された。本研究ではこれを契機に各地の水田以外の止水性水生昆虫の減少が同農薬である可能性に着目し、北海道から南西諸島までの各地の希少水生昆虫生息地で調査を実施、検証を行う。</p>